

神の御業と人の仕業：アンスコムに於ける、観想的知識としての観察に基づかない知識について

山口, 誠
九州大学大学院人文科学府：博士後期課程単位修得退学, 哲学

<https://hdl.handle.net/2324/7392991>

出版情報：総合文化学論輯. 23, pp.15-28, 2025-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。



神の御業と人の仕業

—アンスコムに於ける、観想的知識としての観察に基づかない知識について—

山口 誠

はじめに¹

本論の目的は、現代英国の哲学者アンスコム (Anscombe, G. E. M.) が、主著『インテンション』 (*Intention*, 1957, 'I' と略記) を著す上で重要な概念とした「観察に基づかない知識 (knowledge without observation)」に関して、論者なりの解釈を示すことにある。

本来、アンスコムの『インテンション』は「意図的行為 (intentional action)」を主題とするものである。

意図的行為とは、滑って転んだりするような自発性を欠くような行為ではないが、かといって、自発的なものであっても、他人から騙されたり命令されて為される行為でもなく、電話を掛けたり署名したり、契約したり (cf. I, §47)、要するに、本人に責任や罪、或いは賞賛が帰されるような、或る種の意志を伴った行為のことである。アンスコムは、意図的行為の説明をその行為に関する行為者の知識の説明に帰着させて行う。即ち、意図的行為が成立する為には、行為者は、自らが何を為したのかを知っていなければならない。そして、アンスコムは、その知識のあり方を説明することを通して意図的行為の説明を試みる。この知識は「実践的知識 (practical knowledge)」と呼ばれ、この実践的知識のあり方を特徴付けるものとして提示される概念が本論で主題となる「観察に基づかない知識」である。

観察に基づかない知識とは、目や耳といった視覚や聴覚等の五官を用いることなく得られる知識のことで、実践的知識が成立する時、行為者は、その行為を観察に基づかずに知っていなければならない。そして、この観察に基づかない知識の提示によって、アンスコムは、意図的行為が、世界で生起する、単なる客観的事実とは異なるものだということを、例えば、横断歩道を渡ろうとして手を上げる¹ことが、何らかの電気ショックで手が反射的に上がる²こととは異なる (cf. Wittgenstein(1953), §621)、意図 (意志) を伴った行為だということを示し、意図的行為に関する新たな説明の地平を拓くことになる²。

しかし、以上のような観察に基づかない知識という概念には批判も多い。というのも、仮令、意図的な (intentional) 行為であれ、それは、所謂現実世界で為されるものである以上、意図的行為を知る場合に我々は全く観察に基づいて知っているわけではない³とは言いきれないからである。それは兎も角、本論では、『インテンション』で論じられたアンスコムの実践的知識という概念を論者なりに理解し直し、これによって観察に基づかない知識

という概念の理解を示すことにしたい。本論末尾でも述べられるように、論者の見立てでは、後者を如何に理解するのかを明らかにすることが、『インテンション』を、惹いてはアンスコム哲学を如何に理解するのかを明らかにする重要な論点だと考えられることになる。

第一節 実践的知識の概要

— トマスの説明を手掛かりとして —

本来、知識が成立する為には、その知識を持つ者が (A) 知識の対象たる出来事が起こったという信念を持ち (B) 事実その出来事が起こっているということが、その条件とされる (cf. 戸田山 (2002), 第 I 部第 1 章)。知識の成立に関するこの条件は、本論冒頭で触れた理論的知識に当て嵌まるものだが³、本論の主題たる観察に基づかない知識に関係する、実践的知識の場合は、この知識と並行して、行為者が、(a) 知識の対象たる出来事を、即ち意図的行為を為そうという意図を持ち、(b) 事実その行為を為していることが、その成立の条件とされることになる。

アンスコムは、実践的知識に関して以上のことを述べた後に、『インテンション』§48 の以下の箇所、下線のように述べて、実践的知識の成立を説明するに当たっての聖トマス・アクィナス (Aquinas, St. Thomas) の説明の重要性を指摘し、その後に実践的知識の特徴付けを行っている。

[TEXT 1]

以上の考察を纏めるならば、それを次のように言うことができよう。(a) (信念・意図を表す = 引用者) 出来事の記述が、形式的に、実現された意図の記述であるようなタイプに属し、(b) その出来事が (我々の規準によって) 事実、意図の実現である場合、実践的知識の本性についてトマス・アクィナスによって与えられた説明が成立する。即ち、「知られる対象から導かれる」「理論的」知識と異なり、実践的知識とは、「実践的知性が理解している当のものの原因となるようなもの」である。⁴

(I, §48, 下線 = 引用者)

即ち、T. 1 の下線以下での、実践的知識の特徴付けは、『神学大全』 (*Doctoris Angelici Summa Theologiae*), 'ST' と略記) 第二部第一の第三問題第五項で述べられたことを指している (cf. I, §48, 原注 1)。この箇所で、トマスは、直接的には、実践的知性が「その認識するもろもろの事物の因となる」ものだと述べている。

以上のように考えられる理由に関しては、知識の対象たる意図的行為が、単なる「行為」ではない「意図的」行為であるということが考えられる。

即ち、単なる行為の場合、その行為は、当の行為者が自らの為した行為に関して知っていても成立し得る場合もあり得る。即ち、本論冒頭で挙げられた、行為者が他人から騙されて為すことになる、例えば、行為者が、他人に、或る家の水槽にポンプで飲料水ではなく毒水を供給するように騙されて仕向けられたような、意図的行為ならざる行為の場合、その行為は行為者本人が何を為したのかを知らなくとも成立し得る。しかし、意図的行為が成立する場合、それが、本人に責任や罪或いは賞賛が帰されるような或る種の意志を伴った行為であるが故に、行為者が自らの為した行為に関して知っているものでなければならない⁵。

以上のことから、単なる「行為」が、「意図的」行為であるのか単なる「行為」であるのかを分かつものが（その内実は兎も角）行為者の知識であると考えられることになり、これ故に、知識は、即ち実践的知識は、「知られる対象」たる事実、即ち意図的行為が成立する原因だということになる。

第二節 トマスによる、実践的知識に関するアリストテレス解釈

－実践的知識に関するトマス独自の説明－

以上が、T. 1 の、特に「即ち」以下で述べられた、実践的知識に関する、トマスのものとされる説明に他ならない。

シュヴェンクラー (Schwenkler, J.) は、T. 1 に於ける実践的知識に関するトマスの説明が「トマス主義的な説明」であることを指摘している。本論では、これを踏まえた上で、この実践的知識に関する「トマス主義的な説明」に関して今一步掘り下げた解釈を加えることにしたい。というのも、私見ではあるが、T. 1 の「即ち」以下の説明は前節で提示したように理解され得るが、このような説明はトマスに言及しなくとも『インテンション』で採り上げられているようなアリストテレス (Aristotle) 哲学の文脈でも成り立ち得る「一般的な」ものであるとも考えられるからである (e.g. I, §2)。

このような「今一步掘り下げた「トマス主義的な説明」」は、本論の主題たる観察に基づかない知識の内実を導き出すことにも繋がることになるだろう。

であるならば、「今一步掘り下げた実践的知識に関する「トマス主義的な説明」」とは一体如何なるものと考えられるのか。これを考える上では、我々は次のようなシュヴェンクラーの指摘を手掛かりとすることができる。

即ち、人間が、実践的推理の導きの下に、制作したり行為を為したりするようなものに関する知識というのは、創造された世界に関する神の知識に類似している。このことこそが、後に論じ

るように、当に、アンスコムが、意図的行為に関する知識が実践的知識であると述べた時に考えていたことに他ならないのである。

(Schwenkler (2019), p. 161)

この指摘は『インテンション』の注釈書『アンスコムの『インテンション』 ―ガイドブック―』(Anscombe's *Intention: A Guide*, 2019) に於ける「6 実践的知識」の「6. 1 トマス主義的背景」で述べられたものである。此处で注目すべきことは、無論、シュヴェンクラーが、アンスコムに於いて実践的知識の内実というものが「創造された世界に関する神の知識」に類似するものだと言っているということである。

次節以降では、以上の「創造された世界に関する神の知識」という概念を手掛かりとして、アンスコムの実践的知識を特徴付けていくことにしたい。

第三節 創造された世界に関する神の知識と実践的知識 (1)

―観想的知識と実践的知識―

第一節でも述べたが、T. 1 でアンスコムが採り上げた、実践的知識に関するトマスによる説明は『神学大全』第二部第一の第三問題第五項で述べられたもののことを指している。この叙述は、同箇所でもトマス自身も述べているようにアリストテレスの『ニコマコス倫理学』(*The Nicomachean Ethics*, *Ἠθικὰ Νικομάχεια*, 'EN' と略記) 第一〇巻で為された考察が念頭に置かれている。そして、トマスは『神学大全』のこの箇所でもアリストテレスの実践的知識に関する一つの解釈を行っており、この解釈が、前節で述べられた実践的知識の本性に関する説明に、それも実践的知識に関する「創造された世界に関する神の知識」を介しての説明に反映されることになる。

本来、『ニコマコス倫理学』第一〇巻では、前半では快樂論が (chap. i - v)、後半では幸福論が論じられており (chap. vi - viii)、トマスが念頭に置いているのは後半である。アリストテレスは、後半で、「完全な幸福 (ἡ τελεία εὐδαιμονία)」とは神の有する「知性 (νοῦς)」によって実現 (ἐνέργεια) されるものに他ならないと述べており、この神の知性による実現を「観想活動 (θεωρητική)」と呼び (EN, 1177a17 - 19)、アリストテレスに於いては、この観想活動によって観想的知識が得られることになる。即ち、此处で考えられている神の知識というのは観想的知識に他ならず、観想的知識は、先ずは、前節迄で述べられてきた実践的知識とは異なり、学問的知識 (ἐπιστήμη) のことだと考えられている (EN, 1139a27)。

他方、トマスも、アリストテレスと同様に、観想活動を幸福と考え、観想活動を実現するのは「知性 (intellectus)」であると考え (ST, *ibid.*, 邦訳, 77 - 78 頁)。但し、トマスに於いては「知性」はアリストテレスに比べてその意味の範囲が若干広い。

即ち、知性は、「思念的知性 (intellectus speculativi)」と「実践的知性 (intellectus practicus)」とに分けられ、前者の思念的知性に於いて為される活動が幸福だということになる。このことは、思念的知性の働きが「神的であるものの観照という働き (in tali operatione, scilicet in contemplatione divinorum)」 (ST, *ibid.*, 邦訳, 78 頁) に他ならないということでもあり、要するに、この思念的知性がアリストテレスに於ける知性 (νοῦς) に当たることになる。そして、この思念的知性によって実現される活動が観想的知識を得るところの観想活動だということになる⁶。

また、後者の実践的知性に於いて為される活動は、行為に関わる、即ち意図的行為に関わる実践活動だということになるが、以上のような観想的知識から、トマスは、アリストテレスの実践的知識を、観想的知識との関係性から次のように解釈することになる。即ち、前者たる実践的知識は後者と関わる形で成立するものなのだ、と。この解釈は、次節でも確認するように、両知識は関わりなくとする一般的なアリストテレス解釈とは異なるものだということになる。

第四節 創造された世界に関する神の知識と実践的知識 (2)

一 観想的知識と実践的知識を巡る、一般的解釈とトマスの解釈一

先ず、一般的なアリストテレス解釈によれば、実践的知識と観想的知識の関わりは以下のようになる。

一方で、アリストテレスに於いては、観想活動は、身体の状態やその置かれた状況等に依存しない、言わば知性 (νοῦς) のみによって成り立つ自足的な活動だということになり、且つ、身体の状態やその置かれた状況等によって妨げられることのない持続的な活動だということにもなる (EN, 1177a22 - 23)。これ故に、観想活動は、主に身体を持たないものが可能な活動とされ、この身体を持たないものは神 (々, θεός (θεοί)) と考えられる。即ち、観想活動は、神的な知的活動に他ならず、更に人間も「神々のこの種の活動に類似したもの (ὁμοίωμα τι τῆς τοιαύτης ἐνεργείας)」に与り得ることになる (EN, 1178b27)。

他方で、実践活動は、実践的知識を齎すものであるが故に行為者の生きる世界の中で身体を用いて行われ、また、身体を用いた、即ち目や耳を用いた状況の把握等も必要とされる (EN, 1178a14 - 21)。このことから、実践活動は、身体の状態やその置かれた状況等に依存し、且つ、特に身体的な疲労の影響等で持続するには限りがあり、従って、依存的な・非

自足的な、且つ非持続的な活動だということになる。従って、身体を伴う実践活動は、身体を伴わない観想活動とは全く異なる活動だということになる。

それ故に、実践活動は観想活動の成立に寄与し得ず、これによって両者は関わらないものだということになり、これ故に、同様に、観想的知識と実践的知識も関わらないものだということになる。

これに対して、トマスは前節で紹介した箇所近くで次のように述べている。

かくして、だから、将来の生において期待される究極的なそして完全な意味における幸福というものは、もっぱら観照 *contemplatio* に存するのである。これがしかし、不完全な、つまりこの世において所有されうるとき幸福の場合にあってはそれは、第一次的には *principaliter* そして主としてはやはり観照に存するのであり、ただ、副次的には *secundario* 人間的なよろもろの行ないやよろもろの情念を秩序づけるごとき実践的知性の働きに存するものなのであって、これが『倫理学』（『ニコマコス倫理学』＝引用者）第十巻の所論にほかならない。

(*ST, ibid.*, 邦訳, 78 - 79 頁)

即ち、トマスが、一般的なアリストテレス解釈とは異なり、実践活動も、観想活動の成立の為の補助的な (*secundario*) 役割を果たすものと考えており⁷、それ故に、我々は、トマスが、実践活動と観想活動は関わるものと解釈していると理解し得るのである⁸。

であるならば、トマスに於いては、実践的知識と観想的知識とは関わるものと考えられていることになるが、次節では、トマスのこのアリストテレス解釈に関して更なる説明を加えることにしたい。

第五節 創造された世界に関する神の知識と実践的知識 (3)

ー トマスのアリストテレス解釈の特徴ー

『ニコマコス倫理学』に於ける、観想的知識と実践的知識との関係性に関する、一般的なものとトマスのものとの解釈上の相異は、同書第一〇巻と第一巻との関係性に関する解釈上の相異から説明されることになる (cf. 菅 (2016) & Kraut(1989))。

先ず、アリストテレスは、同書第一巻では、幸福は、政治術を頂点とした戦争術や家政術、弁論術といった実践活動に他ならないと考え (*EN, 1094a27 - 1094b6*)、幸福が観想活動だと明確には述べていない (cf. 菅 (2016), p.149)。この点から、ともすれば実践活動を幸福と捉える第一巻で示された考えと、観想活動を幸福と捉える第一〇巻で示された考えとの間に緊張関係が生じることになる。そして、多少先走るものの、では、このような緊張関係を解決する為には如何にすればよいのかということ考えた時に、其処で採られる

方策には、両巻を切り離すというものと切り離さないというものの二つがあることになる。

即ち、一方で、切り離すと考える前者の解釈は、同書は第一巻から第九巻迄で完結したものとし、第一〇巻はこれらとは別の著作として解釈するというものである。この解釈を採れば、確かに、第一巻で述べられた考え（実践活動としての幸福）と第一〇巻で述べられた考え（観想活動としての幸福）とを別個のものとして扱うことが可能となり、少なくとも同書の範囲内で両者が矛盾していることにはならないことになる。そして、この場合、幸福は、同書に於いては、少なくとも第一〇巻で述べられた考えが除外されている故に、観想活動として成り立つものではないことになる。

しかし、後者の「切り離さない」という解釈に関しては、両巻を同じ著作として解釈し、敢えて両巻で述べられた考えを両立させて解釈する。そして、この場合、幸福は、第一〇巻で述べられたことを重視して観想活動と考えられ、実践活動はそれを言わば補助させる形で成り立つものと考えられることになる⁹。

以上を踏まえた上で、前節で述べられたトマスによるアリストテレス解釈は次のように特徴付けられることになる。

先ず、トマスは、前節で確認されたことから考えれば切り離さないという解釈を採っていたと理解される。というのも、トマスは、「第一次的にはそして主としてはやはり観照に存するのであり、ただ、補助的には人間的なもろもろの行ないやもろもろの情念を秩序づけるごとき実践的知性の働きに存する」と述べているからである。換言すれば、トマスは、同書の第一〇巻と第一巻とを切り離さずに解釈することによって、繰り返すように、実践活動を観想活動の成立の為の補助的な役割を果たすという結論に至ったのである¹⁰。

第六節 創造された世界に関する神の知識と実践的知識（４）

一創造された世界に関する神の知識の二側面を表すものとしての実践的知識と観想的知識一

それ故に、アンスコムは、前節で確認されたような、実践的知識が観想的知識を補助するというものだという、実践的知識に関するトマス主義的なアリストテレス解釈を重視して、自らの実践的知識に関する考察を構築していったものと考えられる。

しかし、両知識が補助的關係にあるということは、無論、誤っているわけではないものの、かといって正確な言い方でもない。両知識の關係は、寧ろ以下確認するように、各々、或る知識の別々の異なった側面を表すものだとして理解され得ることになる。そして、この「或る知識」とは何かということになった時に、その知識に関して考える手掛かりとなるのが、第二節でも採り上げた、シュヴェンクラーの指摘に於いて示された「創造された世界に関する

る神の知識」に他ならない。即ち、実践的知識と観想的知識は、各々、「創造された世界に関する神の知識」の別々の異なった側面を表すものとして、或いはその知識から派生して成立するものであると考えられることになるのである。

本来、意図的行為が為される場合、先ず、行為者は、その行為の目的やその目的の実現の為の手段に関して知っていなければならない。しかしこれらに加えて、行為者は、これらに関して知る為に、自らの置かれた状況に関しても知っていなければならない。何故ならば、そうでなければ、行為の目的も、即ち、その目的が本当に実現可能な目的なのかということも、その実現の為に、如何なることがその手段たり得るのかということも知り得ないことになるからである。

従って、これは次節でも確認するが、結論を急ぐならば、この状況に関する知識が、「創造された世界に関する神の知識」だということになり、目的に関する知識が観想的知識に、手段を表す知識が実践的知識に当たるものだということになる。そして、このことから、我々は、実践的知識と観想的知識が、「創造された世界に関する神の知識」の別々の異なった側面を表すものとして、或いはその知識から派生して成立するものであるという見通しを付け得ることになるのである。

その為に、我々は『インテンション』 § 48 で示された次のようなアンスコム例示を手掛かりとし得ることになるだろう。

[T. 2]

此处で我々はようやく「実践的知識 (practical knowledge)」を問題にすることができる。或る人が、ビルの建設のようなプロジェクトを、その進行状況を見ることもできず、その状況についての報告も受け取らないで、命令を与えるだけで指揮していると想定してみよう。彼の想像力（これは明らかに超人的なものである）は、そのようなプロジェクトの指揮者の場合に一般に観察が果たす役割を演じている。彼は事態がどのように為されるかをただ頭の中で理論的に考えるだけの多くの者とは異なっている。そのような人々は多くの点を未決定の儘で残しておけるが、彼はあらゆる事柄を一つの正しい順序で決定していかなければならない。この場合の、何が為されているのかに関する彼の知識が実践的知識なのである。

(I, §45)

次節では、目的に関する知識が観想的知識に、手段を表す知識が実践的知識に当たり、更には、状況に関する知識が「創造された世界に関する神の知識」だということを明らかにすることにしたい。

第七節 制作的知識としての実践的知識

T. 2 で挙げられたアンスコム事例は、無論、ビルを建設するという行為に関する実践的知識が成立する事例として理解され得るものではある。しかし、我々は、この事例を、ビルを建設するという「制作 (production)」に関する知識が成立する事例としても、即ちビル建設に関する「制作的知識 (productive knowledge)」が成立する事例としても理解し得ることになる (cf. Schwenkler(2019))。即ち、T. 2 に於いては、行為者はビル建設の制作者であり、そして、行為はビル建設という制作であり、その目的はビルという（言わば）作品であり、その為の手段はビル建設の為の手段と考えられることになる。

以上を踏まえた上で、此处で、多少大胆かも知れないが、T. 2 の事例から、前節でも予告したように、我々は目的に関する知識と手段に関する知識を以下のようなものとして考え得ることになる。即ち、目的に関する知識は観想的知識であり、また手段に関する知識は実践的知識である、と。そして、この場合、創造された世界に関する神の知識は状況を表す知識であり、実践的知識と観想的知識は、「創造された世界に関する神の知識」の別々の異なった側面を表すものとして、或いはその知識から派生して成立するものであるということが考えられ得ることになるのである。

先ず、順番は前後するが、手段に関する知識が実践的知識だということは比較的容易に理解され得る。即ち、手段とは、この場合、行為の目的の実現の為に、即ちビル建設を実現する為に何をすべきかということに他ならず、従って実践的知識の対象たる人間の行為に関する知識だということになるからである。

それから、目的に関する知識が観想的知識だということは次のような理由から明らかであろう。

先ず、この知識の所有者は、無論、制作者であり、且つ、「ビルの建設のようなプロジェクトを、その進行状況を見ることもできず、その状況についての報告も受け取らないで、命令を与えるだけで指揮している」。ところで、第四節でも確認されたように、観想活動は、身体の状態やその置かれた状況等に依存しない、言わば知性のみによって成り立つ自足的な活動であるとされるものであったが、それ故に、T. 2 に於ける制作者は、建設現場に関する知識を持ち得ない状況にあるのであり、従って、この場合に得られた知識というのは、建設現場や置かれた（建設現場の）状況に依存せず得られたもの、即ち観想的知識だということになる。

以上の点で目的に関する知識は観想的知識だということになる。

また、創造された世界に関する神の知識が状況を表す知識であるということは次のような理由から明らかであろう。

先ず、結論から述べるならば、この場合の「創造された世界」というのは、制作的知識に於いて考えられている制作者によって、この場合は神によって創造された世界だということになる。そして問題は、では何故、「状況」が、即ち制作者を取り巻く「状況」が、制作

者によって、即ちこの場合は神によって「創造された世界」だということになるのか、ということになる。

制作者（たる神）は、それが、その制作に、熟練していればいる程、換言すれば、よりよい制作ができればできる程、この場合はビル建設をよりよくできればできる程、制作の場、即ち、制作が行われる世界のことを言わば熟知している筈である。というのも、上述のように、もしもそうでなければ、前節でも確認されたように、行為の目的も、即ちその目的が本当に実現可能な目的なのかということも、その実現の為に、如何なることがその手段たり得るのかということも知り得ないことになるからである。

従って、「創造された世界」は「制作者は、その制作に熟練していればいる程、制作の場、即ち制作が行われる世界のことを熟知している」筈であるということから成立することになる¹¹。

第八節 実践的知識の内実、そして観察に基づかない知識の内実 —結びに代えて—

実践的知識の内実

従って、此处で再び第一節に立ち戻って、其処で示された脈絡からアンスコムの実践的知識を説明するならば次のようになる。即ち、前節でも確認されたように、実践的知識は、前節末尾でも述べたような「創造的世界に関する神の知識」としての状況に関する知識から派生したものであると。

そして、だとすれば、T. 1 に於いて、実践的知識は「「知られる対象から導かれる」「理論的」知識と異なり「実践的知性が理解している当のものの原因となるようなもの」である」と説明されていたが、この中に於いて、実践的知識が如何にして「実践的知性が理解している当のものの原因である」のかということは、次のように説明され得ることになるだろう。

即ち、先ず、T. 1 に於ける「実践的知性が理解している当のもの」というのは、当然、実際の行為だということになるが、従って、この実際の行為に関する知識は、即ち実践的知識は、「創造された世界に関する知識」から成立するものであった。というのも、制作的知識に於いては、繰り返すように、行為（制作）の目的を実現する為の手段に関する知識が、実践的知識として、繰り返すように「創造された世界に関する知識」たる状況に関する知識から導き出されることになるからなのである¹²。このことは、実践的知識が、理論的知識に於いてのような「知られる対象」即ち実際の行為から成立するものではないということをも意味することになる。

それ故に、以上のようにして、実践的知識は「「知られる対象から導かれる」「理論的」知識と異っており、寧ろ「実践的知性が理解している当のものの原因となるようなもの」である」と理解され得ることになるのである。

観察に基づかない知識の内実　－ 結論 －

それから、本論の結論として、本論の主題である観察に基づかない知識とは何かに関して論者なりの解釈を行うことにしたい。

先ず結論から述べるならば、アンスコムに於いて観察に基づかない知識というのは、観想的知識即ち行為の目的を対象とした観想的知識のことであると解釈され得ることになる。そして、その理由は、先ずは、観想的知識が、第四節でも確認したように、身体の状態やその置かれた状況等に依存しない、言わば知性のみによって成り立つ、然も、これらの状態・状況によって妨げられることのない持続的な活動たる観想活動から得られる知識であるからだ、ということによる。

そして、観察に基づかない知識は、繰り返すように、行為の目的を対象とした知識として、前節で確認されたように、実践的知識と共に、「創造された世界に関する神の知識」の別々の異なった側面を表すものとして、或いはその知識から派生して成立するものであるということを考えられ得ることになる。というのも、実践的知識の場合と同じく、第六節でも述べられたように、行為者は、目的に関して知る為に、自らの置かれた状況に関しても知っていなければならない、そうでなければ、行為の目的も、即ち、その目的が本当に実現可能な目的なのかということも知り得ないことになるからである。

それ故に、取り纏めて言えば、観察に基づかない知識は、行為の目的を対象とした観想的知識であるものとして、そして実践的知識と共に「創造された世界に関する神の知識」の別々の異なった側面を表すものとして、或いはその知識から派生して成立するものとして理解され得ることになるのである。

引用文献

第一次文献

- Anscombe, G. E. M. (1957), *Intention*, 2nd ed., Harvard University Press: Cambridge, Massachusetts and London England, 2000 (邦訳：『インテンション－実践知の考察－』，菅豊彦訳，産業図書，1984)
- ―― (1965), ‘Thought and Action in Aristotle: What is ‘ Practical Truth’ ?’ in Anscombe(1981)

— (1981), *Collected Philosophical Papers of G. E. M. Anscombe, Volume 1, From Parmenides to Wittgenstein*, Basil Blackwell: Oxford, 1981

第二次文献

アンスコム (1957) , 柏端達也訳, 『インテンション —行為と実践知の哲学—』, 岩波書店, 2022 (注釈書として)

Mizzoni, J., Pegan P. & Karabin, G. (2016), 'G. E. M. Anscombe and the Catholic Intellectual Tradition', in Mizsoni, J., Pegan P. & Karabin, G. (edi.), (2016)

— (edi.), (2016), *G. E. M. Anscombe and the Catholic Intellectual Tradition*, Neumann University Press: Aston, Pennsylvania

Schwenkler, J.(2019), *Anscombe' s Intention: A Guide*, Oxford University Press: Oxford & New York

その他

Aquinas, St. Thomas, *Doctoris Angelici Summa Theologiae*, cura et studio Sac. Petri Caramello, cum Textu ex Recensione Leonina, Prima Pars Marietti, 1952 邦訳 : 『世界の名著続5 トマス・アキナス』, 山田晶訳, 中央公論社, 1975 & 『神学大全 IX』, 村上武子訳, 創文社, 1996

—, *In Decem Liblos Ethicorum Aristotelis ad Nicomachum Expositio*, cura et studio P. Fr. Raymundi M. Spiazzi, O. P., 1949 (英訳 : *Commentary on Aristotle's Nicomachean ethics*, trans. C.I. Litzinger, C. I., Notre Dame, Ind., 1993)

Aristotle, *The Nicomachean Ethics: The Loeb Classical Library*, Rackham, H. (trans.) , Harvard University Press: Cambridge, Massachusetts, 1926 邦訳 : 『ニコマコス倫理学』, 朴一功訳, 京都大学出版会, 2002)

アリストテレス, 渡辺邦夫・立花幸司訳 (2016) , 『ニコマコス倫理学 (上・下) 』, 光文社古典新訳文庫

菅豊彦 (1998) , 『心を世界に繋ぎとめる』, 勁草書房

— (2016) , 『アリストテレス『ニコマコス倫理学』を読む —幸福とは何か—』, 勁草書房

Kraut, R.(1989), *Aristotle on the Human Good*, Princeton University Press: Princeton, New Jersey

戸田山和久 (2002) , 『哲学教科書シリーズ 知識の哲学』, 産業図書

注 釈

¹ 本論は、総合文化学会第29回オンライン・シンポジウム（とき：令和7年5月5日（月）、ところ：オンライン）で行われた同名発表稿を加筆・修正したものである。

² 尚、意図的行為を観察に基づいて知られるものと捉え、実践的知識を観察に基づく知識として客観的・第三人称的に説明する立場は特に「行動主義（behaviourism）」と呼ばれる。アンスコム¹の意図的行為論は、差し当り²は、行動主義的な説明（e.g. Ryle(1949)）への批判が念頭にあったと考えられてよい。

³ 理論的知識とは、知識の対象を世界に生起する客観的事実とするものだったが、その知識が成り立つ為には、そのような客観的事実が知識に先立って成立していなければならない。即ち、単純な例だが、今日は晴れだという事実を知る時、晴れだということがその知識の成立に先立って成立していなければならない。この意味で「知られる対象」たる事実は理論的知識の原因だということになる（描写主義（菅（1998）, pp. 7 - 8））。

⁴ 『インテンション』の訳に関しては菅豊彦氏の訳をその儘使用した。尚、便宜上、本文と表記を統一する為、氏の訳で平仮名表記されているものを漢字表記に変更した箇所がある。また、アンスコム¹の‘intentional action’という語を氏は「意志行為」と訳されているが、本論では「意図的行為」とした。

⁵ 例えば、或る人が、犬小屋を作ろうとして鋸を挽いていたものの、知らず知らずの内に、ギーギーという鋸を挽く（騒）音で隣人に迷惑を掛けていたという場合を考えてみられたい。

後者の行為は、確かに隣人に迷惑を掛けるという「行為」ではある。しかし、これが「意図的」行為なのかと言え、恐らく、そうではない。他方、犬小屋を作るとは、明らかに犬小屋を作ろうという意図の下に為された行為と考えられ得る。そして、以上の場合に為されている単なる「行為」（より基礎的には、腕を上下に動かしたりする行為）が、「意図的」行為であるのか単なる「行為」であるのかを分かつものが（その内実は兎も角）行為者の知識なのである。

即ち、一方で、隣人に迷惑を掛けるという「行為」が意図的行為たり得ないのは、行為者が、そのような行為を為していることを知らなかったからであり、他方で、犬小屋を作ることが意図的行為たり得るのは、行為者がそのような行為を為していることを知っているからなのである。

⁶ 因みに、思念的知識とは異なる実践的知識は「思慮（φρόνησις）」とも呼ばれる。特に、これを如何なるものとして解釈するのかに関しては議論が分かれている（cf. 菅（2016）, pp. 83 - 85）。

⁷ 尚、この「補助的な」と訳された‘secundario’という語は、別の訳の可能性も考えられ得るかも知れない。

⁸ このトマスの考えに関しては、我々は、差し当り、次のように理解し得ることになるだろう。即ち、特に人間に於いては、観想活動を行う為には、それなりの余暇と経済的な余裕がなければならないが、これらを実現する為に実践活動が必要とされることになる。従っ

て、実践活動は観想活動と関わるものだと考えられ、それ故に、実践的知識も観想的知識と関わるということになる。

⁹ これら二つの解釈は、各々、前者は「包括的解釈」と、後者は「支配的解釈」と呼ばれ、何れを採用するかで、長年、議論となってきたものである (cf. 菅 (2016), pp. 148 – 150, 立花渡辺訳 (2016), pp. 528 – 529 (「解説」), Kraut(1989), Introduction)。そして、トマスの場合、確言はできないが後者の解釈に近いと考えられる。

¹⁰ 加えて、別の著作に於いてではあるが、トマスは両巻を同じ著作を構成するものと解釈してもいる (cf. St. Thomas, *In Decem Libros Ethicorum Aristotelis ad Nicomachum Expositio* 英訳, p. 624))。

¹¹ 取り纏めて言えば、以上のことは「実践的推理 (practical reasoning)」とも並行して説明することができる。即ち、実践的推理とは、行為の目的 (規範) を表す命題を大前提と、行為者の置かれた状況を表す命題を小前提と、それから、その目的を実現する為の手段を表す命題から構成されるものである。ところで、行為の目的に関する知識は観想的知識と、状況を表す知識は「創造された世界に関する神の知識」と考えられることから、特に、前者は大前提として、後者は小前提として表されるものだということになる。

¹² 尚、一点だけ強調しておきたいことは、「知られる対象」に関する知識と「創造された世界に関する知識」とは同じものではないということである。このことに関しては別稿に譲ることにしたい。

[God's Creation and Creature's Action: Anscombe on Knowledge without Observation as Theoretical Knowledge,]

[YAMAGUCHI, Makoto, 九州大学大学院人文科学府博士後期課程単位修得退学, 哲学]